

釧路水試だより



18

一斉に出漁するサンマ船団

巻頭言

今年のシシャモについて

北海道のイバラガニはイバラガニモドキ

ホッキガイの蓄養試験から

サンマ資源の消長

開催された会議の中から

昭和44年9月

北海道立釧路水産試験場

巻頭言

場長 福原 暁

道東も、一雨毎に秋の深まりを覚える季節になった。

去る九月一日、サンマ第三次解禁の壮行会が盛大に釧路で挙行され、その日の午後三百隻余の大型船が一斉にとも綱を解き、秋陽にきらめく海原へ出漁して行く姿を、私は太平洋を一望に出来る知人塚の高台から大漁を折りつつ、関係者と共に見送つたものである。

サンマは周知のように、その全盛期には四〇万―五〇万トンの漁獲量を維持して、単一魚種ではわが国一―二の地位を占める重要漁業であつたが、昭和三九年頃から漁獲量が激減して二〇万トンそこそこになり、昨年は一三万トン前後にこれが落ち込んでしまつたのである。それだけに今年のサンマ漁にかける業界の期待は、大きい、遺憾ながら漁況は極めて非細的と言わざるを得ない。

私は数年前、親しい研究者にサンマ資源の危機をうたえたことがあるが、私の予想よりその到来が早まつた感を最近深くしている。

目を一転して近年の日本漁業を眺めると、魚種と漁業、及び地域にその興亡をあやなしながら、昨年は八五〇万トンの生産を上げるに至つた。即ち、遠洋漁業三五%、沖合漁業四〇%で、海面漁業総漁獲量の約七五%を両者で占め、如何にこれ等の漁業がわが国水産業に寄与し、かつ期待されてゐるかをうかがい知ることが出来る。

しかし、わが国の骨幹をなすこれ等の漁業に最近警戒しなければならぬ事象が多々見受けられる。即ち、価格の高い例えばサケ・マス、マダロカツオ、ブリ、タイ、エビ、カニ等の漁獲量が減少し、反面価格の安いスケトウダラ、サバ、スルメイカ等が急増していることである。特に、スケトウダラに至つては、昨年驚くなれ約一七二万トンも水揚げされてゐる。それ故、近年漁業経営体の収支は一般に悪化の傾向にあるようである。また、最近の漁況からサバ、スルメイカ、スケトウダラと言つたわが国

漁業の主対象資源にも一沫の不安が感ぜられるのである。昨年約七五万トンを漁獲してわが国三位であつたスルメイカは、全国的にみて今年はおかしの不漁が予想される。また、サバは道東海域で相当水揚げされたが、二年魚主体の一年魚混じりと言う超小型で、その八〇%程度が魚粕に廻つてゐる。これは大型魚の生き残りが予想に反し極めて悪かつたためである。これ等の若令サバが南下し、全国到るところで漁業の対象になるとしたら、産卵前にはほとんどが獲られ、その結果再生産機能が著しく低下するから、三―四年後のサバ資源が誠に憂慮されるのである。また、スケトウダラにしても近年魚体の小型化と、漁場に変化を来たしていることが注目される。かつて、一〇〇万トン以上も漁獲されていたニンギョウが幻の魚となり、イワシ、ホッケ、アジ、サンマといつた多獲魚が激減して今や高級魚になりつつあるを想えば、全く感無量のものがある。

わが国の漁業にとつて、これ以上多獲性魚類資源を失うようなことになれば、その打撃は尽大といわなければならぬ。日本にとつて魚類資源の減少は漁業及び加工業はたまた関連産業に大きな影響を与えるばかりでなく、食料需給の面で国民生活にも多大な脅威を与えるものである。

私はこの際、もろもろの漁業が対象としてゐる水産資源が商業的にまだ存在するうちに徹底した資源管理をし、吾々の孫子の代まで恒久的に漁業が繁栄出来る方途を積極的に計らなければならぬと痛感している。そのためには、可能なものから順次に所謂栽培漁業を積極的に推進すると共に、科学的調査にもとずきそれぞれの資源に対する産卵期と、幼稚仔の保護を徹底し、大自然の海洋の力によつて資源を維持培養することの威大な効果を再認識し、これを強く推進しなければならぬ。

そのためには、水産業の基礎となる試験研究調査事業を一層充実すると共に、重点的にこれを行い、研究者はその結果にもとずき積極的に発言をなすべきであると考えている。

私は、日本の大漁業基地釧路にあつて、もろもろの漁業の様相をつぶさに見ているが、今日程本道漁業、いな日本漁業の将来の不安を肌身に感じることはない。漁業も目先の利益にとらわれ過ぎることなく、遠い将来に向つて資源が安定し、計画的生産が可能になるよう関係者は協力一致して努力しなければならぬと考えるものである。

今年のシシャモについて

漁期前調査の結果から

漁業資源部

坂本 寿勝
小池 幹雄

シシャモは近年道東の特産種として、ますます需要が高まり、沿岸漁業の重要な資源となつております。一方、漁民の方々も本資源の動向には深い関心をもつており、また繁殖保護についても人工ふ化事業、当才魚の捕獲禁止などの方法で漁民自から対策を立てております。

私たちが本資源の動向については、沿岸資源調査の主要対象魚種として調査研究を進めており、現在では、当才魚の分布様式、漁期前調査から短期予想が可能な段階まで発展しておりますが、魚が増えたり、減つたりする仕組みを具体的に明らかにすることは中々むずかしいことです。なぜなら資源量の変動は漁獲努力量の増減、産卵親魚の卵の量や質、ふ化した稚魚とそれを取まく環境

などと深い関係をもつており、これらの相互関係が数量変動をひきおこすと考えられるからです。

シシャモ資源についての私たちの研究もまだまだ変化の内容を具体的に明らかにするまで発展しておりませんが、九月二日～九月九日、十月一日、に試験船第三新栄丸により釧路～広尾沿岸海域で実施した、本種の漁期前調査から今年のシシャモ漁を占まつてみましょう。

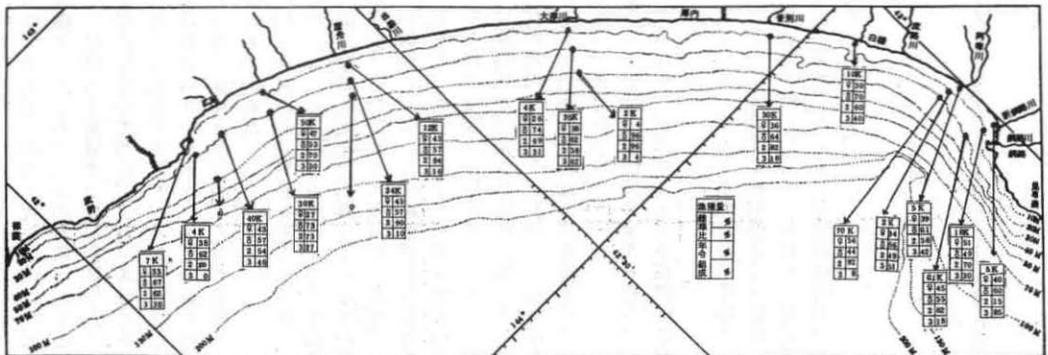
道東のシシャモ資源を大きく三つの系統群に分けて評価していることは、すでに本誌14号で述べましたので、調査対象となつた釧路川系と、十勝川系に分けて述べてみます。

一、釧路川系

(一) 漁場

調査結果から調査点別の漁獲量(一曳網当たり)、雌雄比、年令組成を第一図に示しました。これによると新富士沖水深10m帯、阿寒川沖水深30m帯、音別川沖水深10m帯で10kgから70kgまでの高い分布がみられ、例年と比較すると接岸時期がやや早いようです。また新釧路川沖水深7m付近には三年魚を主体とする大型魚の分布がみられ、初漁期はこの群を対象として新富士沖付近の水深10m帯が中心漁場となりそうです。この群は離合集散の

第1図 調査点別漁獲量(1曳網当たり)、雌雄比、年令組成



度合が激しく魚群行動も速いと推察されるので、漁場形成も複雑で漁船ごとの漁獲にも差があるのではないかと思われれます。また例年水深30m帯に二年魚を主体とした分布がみられますが、今年はこの出現量が少く、漁場も比較的浅みに片よるのではないかと予想されます。

(二) 魚体(第二図)

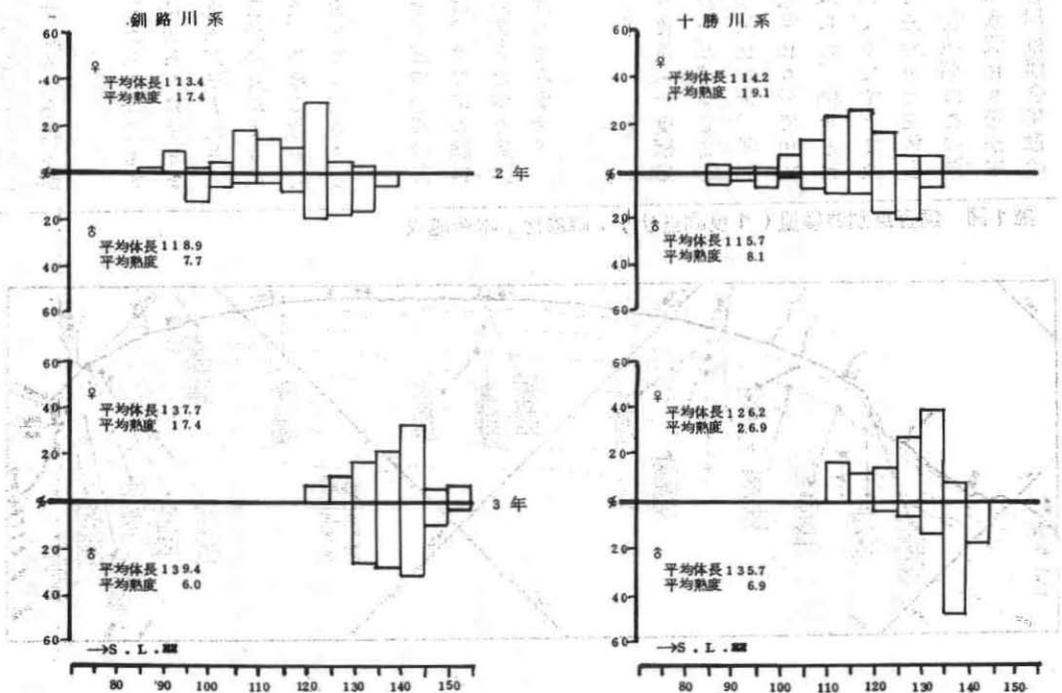
出現した魚体の割合をみますと、体長12cmに山をもつ平均体長113cmの二年魚雌が31%、平均体長119cmの雄34%、平均体長139cmの三年魚雌13%、平均体長139cmの雄21%で、二年魚と三年魚の比率は65:35となつております。昨年同期の平均体長は、二年魚雌125cm、雄135cm、三年魚雌138cm、雄139cmとなつておりますので、今年の魚体は昨年と良く似ております。しかし三年魚の出現率は、昨年の25%より10%程度高くなつておりますので、初漁期の魚体は昨年より大型にみえるのではないかと考えられます。また二年魚の中には10cmに山をもつ成熟しない未成魚の群もみられますので、漁獲物の型は大小にはつきり区別出来そうです。

(三) 資源の動向

シヤマモ資源は昭和36年の卓越的发生年級群により、昭和38年以降高い水準で持続し、

漁獲量も一〇〇〇トン台を維持しておりますが、その後、卓越的发生年級群がみられませんでしたので、資源の大きさは、昭和41年から徐々に下降しつつあります。しかし漁獲量は、漁獲努力量の増加、漁臭効率の増大などによりそれほど影響は受けておりませんが、今後の資源動向には留意する必要があります。今年は昨年のように初漁期は、大型の三年魚が主対象になると思われ、成熟もやや進んでおりますので、この群の河川への北上も昨年並の11月14〜16日頃か、

第2図 系統群別年齢別体長組成



やや早めになると予想され、小さな群のそ上はこれよりも早くから見られそうです。しかし例年盛漁期の主対象となる二年魚の分布密度はそれほど高くなく、昨年水深30m〜40m帯で出現した二年魚のみの単一組成の分布はみられず、この群の漁獲は昨年よりやや下回るものと予想されます。このことは、昨年六月に実施した幼稚魚調査でシヤマ稚魚の出現個体数が少なかったこと、チカ曳網でのシヤマ当才魚の混獲が少なかったことなどから、昭和42年級群の発生量が悪かつたことが考えられ、このことが今年の二年魚に影響したものと推察されます。

総体的には、三年魚を対象とする初漁期は昨年並で、盛漁期の二年魚を対象とする漁獲は昨年をやや下まわると考えられ、このことが反映して、今年の漁獲量は昨年の一、三〇〇トンを下まわるのではないかと予想されます。

二、十勝川系

(一) 漁場

第一図から広尾沖水深20m帯、豊似川沖水深10m〜20m帯、大津沖水深20m帯に30kg〜50kgの分布がみられ、この付近が中心漁場となりそうです。昨年は水深30m帯にも二年魚の群が高い密度で分布していましたが今年はずほとんどみられないようです。釧路川系同

様三年魚と大型二年魚が主対象になると思われますので、群行動も早く、複雑な漁場形成が考えられ、漁獲量にもむらがありそうです。

(二) 魚体

魚体の出現割合は、平均体長114cmの二年魚雌30%、平均体長116cmの雄38%、平均体長126cmの三年魚雌10%、平均体長136cmの雄22%となっており、釧路川系に比較すると魚体はやや小型です。また二年魚と三年魚の出現割合は68:32で釧路川系に類似しており成熟度合は、二年魚、三年魚とも釧路川系より進んでおり例年のように河川へのそ上は釧路川系より早いと推察されます。漁獲物の型は、昨年同様大型に片よるものと思われれます。

(三) 資源の動向

この系統群の資源動向は釧路川系と同様で昭和36年級群によつて高い水準で持続しておりますが、昭和41年以降から減少の傾向が現われております。しかし漁獲量は、漁獲努力

量の増加により、41年以降上昇を続けており、現象的には資源の増加傾向がみられますが、一曳網当り単位での密度は減少しつつあります。

総体的にはこの海域も、初漁期の三年魚、大型二年魚を対象とした漁獲は昨年並で、盛漁期の二年魚を対象とした漁獲は昨年をやや下回ると予想されます。

三、むすび

以上のように私たちが漁期前調査で得られたデータから今年のシヤマ漁を占なつてみました。漁獲量は昨年を下回つても金額は増加することも考えられます。しかし私たちの願いは、昭和36年級群のような卓越的生群が現われて資源がより高い水準に上昇すること、また私たちの予想がみごとにはずれて、今年も大漁であることを願つて止みませ

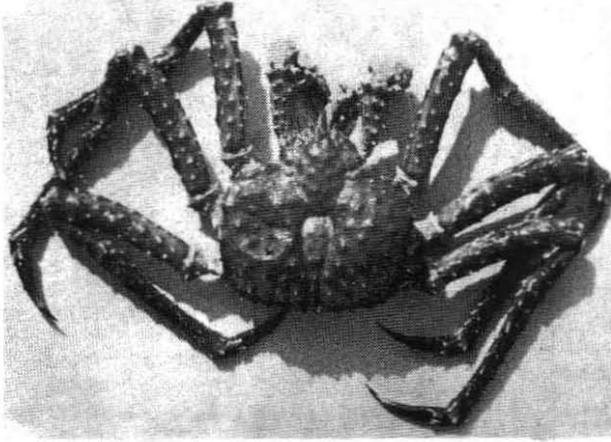
北海道のイバラガニは イバラガニモドキ

漁業資源部 阿部晃治

オホーツク海に面した北海道の港や、最近では根室港でも良く見かけるカニで、俗にイ

ラバガニと区別できません。

ところで、このカニの正式の和名はイバラガニではなく、イバラガニモドキが本当です。今から数年前の昭和42年に、東京水産大学の久保伊津男先生がお元気な頃、福島県産のこのカニをみて、和名をイバラガニモドキと命名されました。当時福島県でもこのカニを北海道と同じくイバラガニと呼んでおりましたが、地元の福島県カニ籠漁業組合ではイワキ



イバラガニモドキ

ガニと命名してくれるようにと先生に提唱したそりです。

それでは、和名イバラガニとの違いはどこかということになります。イバラガニは俗にアカガニといわれるように、生時の体色はあざやかな暗紅色を呈しています。またカニの先端のつきでた部分「額角」は大変に長く全部で5本の棘を有しております。また甲ら（頭脳甲）の表面には20本ほどの長い棘を持つております。分布は相模湾、土佐湾、外房・天津小湊中などの水深三〇〇〜六五〇mから知られているのみです。

一方イバラガニモドキは、生時の体色は褐色に近く、額角も比較的短く、棘の数は9〜10本です。頭脳甲表面には多数の棘を有しその全棘数は111〜161本もありますが、あまり長い棘はありません。分布は総じて寒海から広く知られ、古くはベネディクトという研究者が一八九四年にベリング海から報告し、続いて幾人かの研究者により、ブリテイッシュ・コロンビア、南部カムチャツカ西方沖、本邦近海からは塩屋岬、金華山沖、房総半島などの水深三〇〇〜六〇〇mから報告されました。北海道周辺では、釧路沖合、ウルフ島沖合、太平洋側、エトロフ島沖合太平洋およびオホーツク海側、樺太東岸沖合などの水

深二〇〇〜七〇〇mから確認されました。

生態については充分な知見はありませんが8月上旬に根室港で測定したものの中には成熟した雌、これから脱皮して産卵に入ろうとする雌、新子を腹部に抱いた雌などが混在しておりました。これからみますと、産卵期は近縁種のタラバガニ、ハナサキガニなどよりは遅いようです。

最後に、この種の分類学上の位置をしめしますと次のとおりです。ケガニなどの真正蟹類とは異つて、タラバガニなどと同様にヤドカリに近い動物であることがわかります。なお水揚物の中にはイバラガニやイバラガニモドキでない、他のイバラガニ属の仲間も含まれているかもしれませんが、まだ確認していません。

節足動物—甲殻類—十脚類—爬行類—異尾類—寄居蟹類—タラバガニ科—タラバガニ

理科—タラバガニ属……タラバガニ、ハナサキガニ、アブラガニ
—イバラガニ属……イバラガニモドキ、イバラガニ等
—バラロミス属……バラロミス・ムルチピナ

『普及員だより』

ホツキガイの蓄養試験から

広尾地区水産業改良普及員 黒滝 茂

広尾地区では現在、

ホツキガイ漁業に着業する漁家は三十二戸で、資源の恒久的利用の建て前から各漁船ごとの漁獲量割当方式（許容量）によつて、年間三ノ四トン、六ノ七〇万円を生産目標のもとに操業されています。

ホツキガイはアワビ、ホタテガイとともに北海道で生産される貝類の代表ともゆりべき種ですが、広尾における月別の単価を見ますと別表の通りで漁期を通じてその値段は大きな浮き沈みの連続。

月別の平均単価 1kg当 月

月別 年級	10	11	12	3	4	5	平均
42	190	176	164	144	122	167	155
43	194	200	171	143	161	224	187
2年平均	192	188	166	144	142	196	

従来この不安定な価格変動を少なくしようと一定以下の値段になつた場合は業者の申し合せによつて沖止め等の処置を講じて、ある程度の値くずれを防いで来々訳ですが、意に沿うような効果が上がつていない現状です。

たまたま白糠漁協において蓄養試験の結果好成绩も得たとゆうことが漁業者間で話題となり広尾においても一時的或いは短期的な人為管理による蓄養によつて、価格の安定向上と夏期の需用期における供給で漁家収入の増大を図ろうと、水試等の指導を得ながら四三年から試験的に実施、ある程度の見通しを得ましたのでその概要について述べさせていただきます。

蓄養施設の概要

四十三年はホタテガイの蓄養籠を利用して海中蓄養試験を行ない、その生存率や重量変化等に殆んど減耗がなく蓄養の可能性が実証されました。しかし荒天時の籠の管理、出荷

作業の困難性等の欠点があり、本年は陸上施設において試験したものです。

蓄養水槽は横二米、長さ四米、高さ一米のナイロンターボリン（塩化ビニール系）で作成した鉄棒（アングル）で支え、自吸式ポンプで汲み上げた海水が直接常時水槽に注入、その分が排出されるよう調節、天然飼料の供給と通気が同時に行なわれるように設置。

蓄養函は水槽に二列に配列、一函にホツキガイ約二十ヶあて收容多数に積み重ねても水槽内の海水が充分に流通するよう配慮しながら木製の特許寸法魚函を製作し使用した。

一水槽に蓄養函百四十枚約八百キロのホツキガイを收容出来るがこの水槽六面で約五トンの施設とし、口径八ミリの自吸式ポンプに三七キロのモータをセット各水槽に配管給水出来るようにしました。

試験の結果

試験は春漁期初めからの予定でしたが、施設の整備が遅くなり結果的には漁期末（十勝海区は六月より禁漁期）の五月末からとなりました。試験に供したホツキガイは僅か四百キロと蓄養能力の十割以下でしたが、五月二十九日開始、蓄養日数二十三日目の六月二十一日から逐次四回に分けて出荷、三十五日経

過の七月三日で試験を終りました。

その間、蓄養中におけるホツキガいの生存率、重量変化、市場性について調査しましたが、その結果を見ますと、試験蓄養総ヶ数一三四〇ヶ（三九五キロ）に対し死亡したものは、四九ヶでその生存率は九六四〇と予想以上に死亡員が少なく、重量では一〇〇ヶのホツキガイについて定期的に計量したところ殆んど変化がなく蓄養時と出荷時の総体計量比較では四〇増となつています。これは蓄養中のホツキガいの活力、飼料を摂取している状態、生殖巣の成熟から見てもうなずけます。

次に蓄養後の市場性ですが全道的な禁漁期で品不足のためもあると思いますが、別表の通り一キロ平均四六一円となり蓄養時の三二二円から見ますと四三〇にわたる一三八円高となり、これに要した直接経費（電力費を除く）として一キロ一三円で差引き一二五円の蓄養益となりました。

まとめ

広尾において実施しましたホツキガいの陸揚げ施設での蓄養試験結果について、その概略を簡単に述べましたがその目的とする魚価安定向上による漁家収入の増大に充分期待出来る方法であるとの見通しを得たような気が

蓄養後の出荷価格

月 日	蓄養日数	数 量	金 額	単 価	蓄養時の数量・金額
6.21	23 日	90 Kg	43,000 円	477.7 円	5月29日 395 Kg 127,268 円 @ 322.2 円
6.26	28 日	102	45,570	446.7	
6.28	30 日	94	51,700	550.0	
7. 3	35 日	85	41,690	490.4	
計		395	181,960	460.6	

注 死亡員があるため内訳と計とは一致しない

します。

しかし今回の試験によつてホツキガイ蓄養事業としての全部が解決された訳ではなく、蓄養

のためのホツキガいの選別、施設の管理体制の確立（海水供給、死亡

員の早期発見と除去、水槽

の定期掃除）

出荷時期の判断等技術的にはまだまだ残された事柄も多くこれ等が

解決されて初めて充分な成果が得られる

と思います。

秋も深まり

ホツキガイ漁業も盛漁期に入りました。よりよい漁業であるようお互に頑張りたいものです。

試験調査船のうごき

(1) 北辰丸

九月：南千島沖合及び東方沖合におけるサンマ、スルメイカの分布、生態、標識放流調査

十月：東方沖合におけるサンマ分布調査並びに幼稚仔の調査

十一月十二月：中南部千島沖漁場開発試験（トロール漁具による）

(2) 第三新栄丸（備船調査船）

九月：広尾、釧路沖におけるシシヤモ漁期前分布調査

九月下旬：釧路沖におけるババガレイ分布調査、標識放流調査

十月：広尾、釧路沖合における毛ガニ漁期前分布調査、シシヤモ分布調査

十月末をもつて備船新栄丸による沿岸調査を終了する。



随想 サンマ資源の消長

福原 暁

道東の初秋も過ぎ、見事な夕焼けが阿寒の空と、太平洋を染める季節になった。この頃がサンマの旬(しゅん)で、道東の主要港特に釧路は全国からのサンマ漁船で々々相まじ、マンモス魚市場は鮮やかな銀青色に輝く大型サンマで埋まり、漁船の機関の音や、威勢よい漁夫のかけ声等の騒音の中で仲買人達の競り風景が毎朝見られたものだが、近年それ等の光景が次第に影をひそめ、残念ながら今年はこれが一段と低調なのである。

その反面、魚価はうなぎ上りで全国の平均産地市場価格が昨年はキロ当り約六〇円、サンマが非常に沢山獲れた三七年が一三円であるから当時に比べおおよそ五倍も高くなつており、今年はそのを更に上廻ることは必至である。現に釧路港における九月上旬十日間の平均魚価は昨年の約一七倍もしており、市内の小売り店では大型サンマが一尾八〇〜九〇円もする。また、東京築地の競値は昨年の一、五倍のキロ当り約四六一円で、関係方面の消流調査では東京都の標準小売り価格は産地価

格の約一〇倍が相場と言うからサンマの全国的な高値はおして知るべく、秋の味覚として山のマツタケや、クリと共に、また安くて栄養のある庶民の魚として日本人にこよなく愛されたサンマもこのままだと高級魚となつて国民から忘れ去られるのではないかと危惧をぐするのである。

目を閉じると、サンマ漁業の盛衰が走馬灯のように脳裏をかすめ、その全盛期を知る人々に大きな寂寞感と、深い郷愁をつのらせている。

サンマはダツヤサヨリ、トビウオなどと親類筋に当る魚で、北太平洋に広く棲んでおりアメリカ大陸側と、極東側に多くみられ、おそらくこれらの分布は連続していると思われる。アメリカ大陸西側の分布は北はアラスカから南はメキシコに至る水域に分布をし、西はハワイ諸島近くまで知られている。一方、

極東側の分布は季節的に北は千島列島、樺太から南は九州、沖縄附近に達し、西は支那海東部から日本海一帯、東は太平洋遙か沖合に

まで拡がっている。

日本近海のサンマは南千島から常盤海域にかけて厚群をなして回遊し、八月から十二月頃まで随所に好漁場が形成されて、全盛期の昭和三〇年台には二千隻を越えるサンマ漁船でにぎわい、一隻数万ワットもの集魚灯を使用するため、これらの漁場はさながら不夜城を呈して漁獲量も四〇万〜五〇万トンに達したものである。それが三一年、三五年、三九年と二〇万〜三〇万トン程度の不漁に見舞われ、その後二〇万トンそこそこの漁獲量に低迷し、昨年は驚くなかれ一二万トン台に激減してしまつた。

その間、魚体組成にも変化をみせ、全盛期には大、中型群が高い水準で安定して現れていたものが、隔年に出現するようになり、四二年からは脂(あぶら)の充分にのつた大型サンマは非常に少なく中、小型サンマが主体となり、今年などは三〇櫃前後の大型サンマが極めて少なく、そのほとんどが中、小型サンマで漁況も昨年に比べ非常に悪いと言いうのが現状である。

日本近海のサンマ資源はここ数年前から明らかに減少しているが、その原因についてはまだ明確にされていない。サンマ魚群が何等かの要因で沖合回遊をするようになったとか

自然条件例えば海流とか水温といった環境の変化によつてサンマが卵から親になるまでに大量に自然死亡したためとか、漁獲の影響つまり乱獲説や、近年ノ連が千島近海で小型サンマを大量に獲り出したための影響だとか色々議論されているが、前述のように資源減少の原因は不明のままとなつている。サンマ漁業にとつて現在一番大切なことは資源を減少させた原因を明確にして、資源回復の抜本的な対策を早急に立てることである。

私は、強力な集魚灯を利用してサンマを一網打尽にする超能率漁法が本格化した昭和二二年頃から極く最近までの永い間、その研究生活をサンマに捧げて来ただけに、サンマを愛する気持ちは人一倍である。私は日本近海のサンマ資源をこのまま放置するならば、近い将来一〇トン未満の自由操業船を主体にした小規模漁業になつてしまふと考へている。

今日のサンマ減少の原因について私の推測では、この資源は膨大な漁獲努力の影響を長年受け、そのためサンマは産卵親魚数を徐々に減らし、近年それが激減して再生産機能が極めて悪化したことによるものだと考へている。

漆黒の海頭を船首が波を噛み、魚群探照用の探照灯が強烈に海面を照射するとサンマは

狂喜したかのように水面に乱舞して、さながらスコールに会つたような光景を呈する。停船すること、集魚灯に輝く船の周囲は銀青色に色どられたサンマの大群でたちまち埋まり、獲れども獲れども集群して、サンマ船は間もなく満船するのである。その全盛期には二千余の優秀船が、産卵する前にサンマを獲りに獲つたわけであるから、資源に与えた影響は尽大であつたと考へている。

私は、サンマ資源とその漁業を心から愛する故に、関係者は大乗的な見地に立つてものを考へ、わが国としてはノ連を含めてサンマ資源回復のため、思い切つた対策を早急に立てなければならぬと痛感している。

脂の十分のつた大型サンマが秋の陽ざしを受けて店頭に並び、安くて美味しい旬の魚として再び庶民に歓迎されるように一日も早くなつてもらいたいものだ。

標識放流魚について

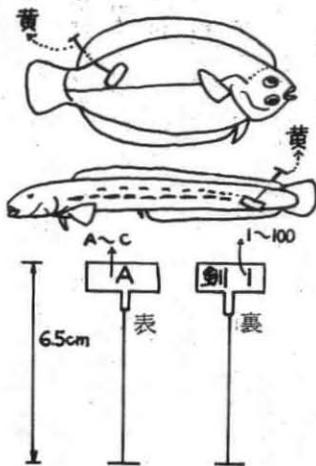
資料科では、四四年度の沿岸資源調査の一環として、ババガレイ、ヌイメガジ（通称マカジ）について、産卵場と群の移動を確かめるため、ババガレイは、釧路沖海谷部東側、

（通称下セツリ）の九〇〜一〇〇mに二七〇尾、ヌイメガジは広尾ノ湧洞沖一五mに約二〇尾、の標識放流を実施しました。

ババガレイは、昨年までも標識放流を行つて席々に移動回遊の状態が明らかになりつつあり、今後の具体的な漁況予報に役立つよう努力をしております。ヌイメガジは、十勝地方の新しい漁業対象種として、四二年度から試験採集を行つていましたが、今年度、初めて標識放流を行いました。

標識の方法も、昨年までのビニール製スバゲティチューブ方式から、標識ガンを使う方式に変えました。

標識魚をみつけた方は、場所、月、日とともに当水試か漁組に魚体を届けて下さい。薄謝ではありますが記念品を用意してあります。





水産加工品開発検討会 東北・北海道ブロック会議

水産庁主催で開かれる

多獲性魚（主としてスケトウダラ・サバ）

を原料とする新規水産加工品の開発を行い、これらの需要を増すことは水産業の振興を図る上に重要なことである。このため今般水産庁が主催して釧路、八戸、長崎の三市においてブロック会議を開催し各地の意見を徴して明年の三月迄に結論を出すことになり九月二十六、七日阿寒湖畔ホテル市川で開かれた。水産庁からは研究第一課石若企画官、湊係長、東海区水産研究所から野口部長外五名、各道県の加工行政担当者（北海道、千葉、茨城）十四名、試験研究担当者（北海道、青森、岩手、宮城、福島、茨城、千葉、新潟、富山、静岡の水試関係）十七名、関係水産団体（漁連、冷凍魚肉協会、機船漁業協同組合連合会、蒲鉾協同組合など）八名、地元水産団体（釧路市水産加工連、すけそ対策協議会、冷凍すり身支部、冷凍缶詰協会など）七名、合計五十四名が参集した。

池田水産部長から「集中的に短期間に陸揚

げされるサバ、イカ、スケトウダラの処理と採算性および試験研究に対する要望が挨拶として述べられ、石若企画官から地域的に定期的に集中する多獲性魚の有効利用を計り、品質については多様化、規格化の要望に対応する近代化と経営の合理性の高まつている。最近における経済情勢の変化、水産物の需給情勢に対応するためにも利用技術の開発、改善を積極的に進める必要があるが、零細規模の業態も多いので関係研究者、業界の指導者などで水産加工品開発検討会を開催し多獲性魚を中心に水産物の新規加工製品の開発、改善に関して解決方法と推進体制の整備について協議したいと主旨と今後の進め方について説明があつた。

水産加工業、試験研究に対する諸施策について資料にもとづいて説明が行なわれた。各水試の研究担当者間で討議したスケトウダラ・サバの利用に関する研究の現状について北林技官から取まとめて報告された。報告

の内容については本誌で後日紹介したいと考えているが、新製品の研究課題として「誰がどこで、つくり上げるのか」「成果はどうしたらよいか」「行政、業界の要望と各研究機関間の調整と研究限界をどこにおいたらよいか」が問題となるであろうし、各都道府県の実態から研究班としての連繫が必要であるなどが提示された。業界の代表として工藤専務（輪加連）から企業の実態を述べられ、「販売流通の対応、新製品の商品開発までの資金導入（実験工場）研究成果の迅速なる普及、組織化」について要望が提示された。竹谷専務（冷凍魚肉協会）「冷凍すり身の原料鮮度に対応する製法とうま味のある魚の配合利用」野口専務（機船漁業協同組合）「鮮度保持に関する一連の指導と中間的処理加工品の開発」石岡副理事長（蒲鉾協組）「品質のよい練製品が伸びているので北転船スケソの鮮度の保持について検討（有、無頭）」菊地部長代理（漁連）から「スケソの肉の粉末の製法と将来の旨通し」について夫々概要の説明と試験研究に対する希望が提示された。漁業生産者団体、加工団体と国と道の行政および静岡以上の研究者と一同に会して現況と問題点、開発の推進方策を話合つたことは今後の多獲性魚の利用を計る上に有意義であつたものと

考え、三地域のブロック会議の総合とりまとめに期待するものである。

このあと水産物の流通利用技術の試験研究の推進構想を討議したのち、一行は副港、日本化学飼料KK、金井漁業KKを見学し開散した。

新知識の普及・技術交流など

業界・行政・水産試験場直結

水産技術開発懇談会開かれる

道東地区の水産業の発展を期すために、これまでとかく疎速になりがちであつた水産業界と行政、水産試験場など相互の連繫をたかめ新知識、技術交流、普及、情報の交換による水産技術開発の促進を図るべく消費者団体も含めて九月十六日午後、釧路市漁協協議室で七十名参集のもとに第一回の懇談会が開催された。

この懇談会は十勝、根室、釧路の三支庁管内における漁業関係団体、漁業者、水産加工関係団体および加工業者、消費者団体、水産試験研究機関、関係支庁および沿海市町村の代表をもつて構成され原則として年一回以上開催されるもので、座長に釧路支庁長があたることを決めて正式にスタートされました。協議の内容は①水産振興に関すること ②

会議や見学などの運営に当りまして色々とお配慮を戴いた釧路支庁、関係業者の方々へ地元水試として深謝の意を表します。

(猪川 記)

③試験研究成果の普及、指導に関することが主な内容となつておりますが、この主旨について道水産部田中水産課長補佐から道立五水試管内で進められている各地区の結成状況や全道的に反映させる方法などについて、また釧路支庁水産課長から開催要領について説明があり活発な質疑が行なわれた。

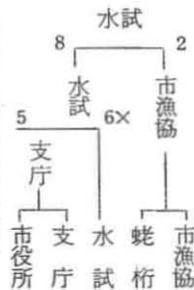
この懇談会の開催について各地区からそれぞれ建設的意見が提示されたが、より深く専門的なことを協議するために部会（漁船漁業栽培漁業、加工）を設置することとし、各部会の構成については後日協議して決定し、必要の都度開催することとなつた。

水産四者協議会

親睦野球大会

水試チーム
四年振りに優勝

釧路支庁水産課、釧路市役所水産課、釧路水産試験場、釧路市漁業協同組合、同蛸桁網部会の四者で行なわれている恒例の野球大会が快晴の八月二十四日（日）桜ヶ丘小学校グラウンドで開かれた。大会長阿部組合長の挨拶、福原場長の選手宣誓のあと右の組合せによつて、美技、珍プレー続出の中に進められ、水試が四年振りに優勝をした。優秀選手、打率六割の打撃賞、本塁寸前でタッチアウトの偉駄天賞、迷選手賞など受賞者は誰でしょう。



活躍したメンバー

選手、打率六割の打撃賞、本塁寸前でタッチアウトの偉駄天賞、迷選手賞など受賞者は誰でしょう。

寄りに昆布

◇道東海域におけるサバ漁も小形群が多くみられたが好漁のうちに終漁となつた。形が塩蔵や冷凍品に適しないと云うことから飼、肥向けに相当量廻わされた。水産加工品開発検討会で研究者によりサバの利用について、角煮、くん製、調味干品、味噌漬などの形のあるもの、ねり製品化の研究など、主として東北の各水試から発表があつたが、道東においてもスケトウダラすり身の裏作として周年稼働や新しい食品素材としての試験研究も等閑視出来ず着手した次第。

◇ サケ、ケガニ

シシャモも また

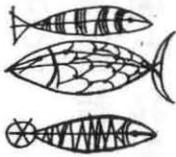
よし 北の国

味覚の秋となりました。当場で人工飼育中のケガニの幼生(メガロツバ)も甲長9ミリ位に成長しましたが、餌料のこともあつて係員の努力もまた大変。そこでカニ類、シシャモの見通しなどについてのせましましたが、二年生魚群の出現の少ないのが気にかゝります。秋イカと共に好漁を期待したいものです。

◇昆布、ワカメ、ノリ、シシャモなど栽培漁業もそれぞれの環境に合つた地についた検討が行なわれていますが、今の度は広尾地区の黒滝普及所長に御多忙中にも抱らず「ホツキガイの蓄養試験結果」について投稿を戴きました、深謝の意を表します。

◇天高く、スポーツの秋を迎えました。野球に引続いて行なわれた道職員のソフトボール大会にも児童相談所、保健所に勝ち、決勝で支庁税務部に惜敗して準優勝をかざりました。北海道の第三期計画を基盤として四十五年度の事業構想の取まとめの秋となりました。

行政協議会に、各部の担当者会議など地域に密着をした事業計画を組むべく、スポーツを通じて鍛えた肉体をもつて水試の連中も頑張っております。これが実現のために皆さんの御支援をお願いいたします。



釧路水試だより 第18号

発行月日 昭和44年9月30日

編集発行人 福原 暁

発行所 釧路市浜町16

釧路水産試験場

印刷所 釧路総合印刷株式会社